



女性

土江香松

無限の波乱を呼び起した前世紀の世界歴史
に於て、我が日本はほとんど閑居した。太平洋
の暴風は波乱を来せしめ、たゞ時々の遠波
が東瀛を襲つてゐるだけであつた。けれど、
世紀末の波乱は、前世紀の波乱に比して、
前世紀の初頭は、佛蘭西とドイツとの
思ひ上の大競争の波が、歐洲全土を震撼せし
めた。現世紀の初頭、世界大戦の波が、
幾多の褶皺を巻き起し、その動乱は果して
知らぬ存続にある。我々はこの人為的動
波の揺らぎに、即ち陷中する。また我々日本人の
上には、未曾有の大災が加へられ、
我々はいま、^{人為的動}訓練を受けつゝある。この
あり、^{人為的動}大訓練をゆつゝ受けてゐる。この
あり、^{人為的動}大訓練をゆつゝ受けてゐる。この
あり、^{人為的動}大訓練をゆつゝ受けてゐる。この

行

我々はこの試練の前の屏せり。緊張した意識と確かな自信と。大なる希望とをもつて。またねばならぬ。その前世紀の初頭。佛蘭西が幾多の政変と揺さ揺した時代の人々は。如何なる覚悟と。如何なる抱負と。如何なる自信とを携つて立ちあがりか。当代の女性。海は如何なる。ちつた。か。我々は今現世紀の曙光期に身を置けてゐる。のである。振返つて前世紀の曙光期。今し波乱の疊々たる中を歩いた人々。特にその女性。の姿を調べて見ると。我々も。ちつた。何等かの心かまへの資料にたづねては言へぬ。

フリス

我々は今此の時代の偉大な女性代表。當時の羅曼的尊敬と名譽とを一身に集め。女性の田舎とその文藝活動とを指揮しつた。ジョ・サントと扱つて来た。その生活と伝説とを解剖して見ると。この解剖が果して如何なる印象を。現代の我々日本の女性性。の胎に映せしむるか。私は上擧るその現代日本女性の胎に映じたる印象初見とを

~~文学~~

知つたいと思つてゐる。

佛蘭西革命の文藝的表現と云つたもの、そ

れがロマンチズムと呼ばるゝ文藝である。即ち

一うゝ個人意識の確立解放と、他方にはこの

個々人の平等観、同胞観の伸張、これが浪漫

主義文藝の基礎である。そしてそれは十八

劇行

十九年以後の佛蘭西に於て當代の主潮となつ

て、様々に文藝の形を綴り出したのである。

ゾラ、ジ・カン、ド・ラ・ロシュ、四年に生れ

た、十七年死んだ。彼女が一生を分れば

おおよそ四期に分けらるゝ。オーストリアの時

代、オーストリアの個人自覚と心情の上にたつ

て、誤れる約束と破つて、奥奥の憂鬱を生んで

した時代、この時代、情結解放の物語は「ア

リ」以下五篇ある。これは、廣く交友とある

時の思潮とを體現し、具作化した時代、これ

は相対する彼女の創作は、當時の社会思想の

代表として「ア」以下の水車屋、四篇ある

。此時代は彼女が所謂十八年の革命と際合

して、政治運動にもたづなつた時代である

行軍

オミは、自己の身辺に一層近い、生るまじ
の郷土の自然の中、親しく馴染した農民生
活を概観した時代、~~平井~~その作品は、
魔の泥と共なる篇である。オミは、彼女が祖母
としての孫むを愛したと全くと、人（男）好き
由生流り過去に溯つて、その経路を物語るこ
ろの時代、歴史小説を書いたのである。その他、
ナル候この他四篇の作品がある。その他、
自分の生涯を書いた「我が生」の歴史、詩人プル
ズント・ドリ・ミツセと、開自かこを書いた「彼女
は彼女」及び「君留集」がある。

彼女の日 創作は極めて自然な、極めて易い
から、また極めて多層的な書物である。は
とんど流れて、たまぬ雲の如く水の流る如く、君
き初うとある。作者自身が、その作品の如く、
廣がり行くかを知らぬもの、如く、自分の心
を忘れた。一管のペンから先きから幾多の生
命が、隠れて、何れ幾多の生命が、その流る路の
口をわけて、流れてはしり生る如く、百様である。
彼女は母解かその胎息と着る如く、その時が

割符

まゝ、その胎児が自づと天日の下を生れ生つ
るこ、ちた、母親は自身を顧みその頃の生長
と一人を、く、ぬく、結核の創傷は全く、自
然の創傷そのもの、いふまでもある。作意の
果ひはたしして、自然の発生である。即ち母
胎の文藝と理知と、最もよく型になる。
彼女が系統の旧い家族に生れ、
舎、ノアングで生長し、早く父と告げ、祖母と
母との手び育てられ、やがて、修道院の寄宿
舎へ送りぬ、宗教の信仰と、一般教養の生活
とを遂つてゐた。数学も、自然科学も、とく
に、文藝も、音楽も、何れ其處で修めなうであつ

た。年代の近き人とし、彼女がシャトリアリ
アンを愛した。特ニジャン・ジャック・ルリソは
一般の浪漫主義の文藝者の手取りず、其代の
青年を代表した如く、彼女も、やがて其の自
由の炬火を、いかに燃やした。自由の光とは
いかに輝いてゐる人であつた。

行

或る女性が個人意識を目醒め、自由と思ふ
時、その人は必ず、きつて自己の心悟を

於て、その自由と確立せしうんと望むのは、
然の事である。ルソオは、その女性の純情
と旧習との衝突、情事、有るに、ジュリーの物
法を費した。身置、ある處、女の自分の
家庭教師と戀したけれど、父親はその二人の
向をさして、他の男と結婚せしめた。彼女は目
の心の憂ひあつた、と、眞つて、走つて、
去つて、一切を告げし、極端に忠実に妻として、
去つて、母として主婦としてゐた。その去つた了
解ある人で、始めと深く憂ひ、過去と、あうが
して、その以前、ジュリーの戀人が家庭に入
つた、と、ゆつてゐた。ジュリーは、けつさう

した人、要として、この意、母として、この意、
と、此人と、此人として、此人として、此人として、
この目、醒めた純情は、いかに男の心を、消して、
去つた。その中、多分、かゝる落ちて、危く、
たつた。救ふたう、此人として、此人として、
病氣、と、此人として、此人として、此人として、
年、救はれた。——此人として、此人として、此人として、

行

こ 常に見ると人々相違がある。
佛しにウソはこの純情の強からんを求む
た。純情の純情とは自然情緒の本然の姿であ
る。この深く純情とは何物をも焼くこ
純情をせしめ、その包むものとして有徳なる
たらしめる。この純情の純情を磨くものは
偏見か、偽善か、少くも無用な誇張かであ
る。少女時代の過オルジュ・甘んとの腹は、
当分の一般の人々を純情と令けり。この純情
純情が燃えはしめる。
純情は修道士を年々帰ると、十七才で
結婚した。この結婚生活は純情とつて幸福

びらあつた。理解し合はれたい家庭生活の片じ
みの中より、純情は仰り、子供を産むま
まで、純情はこれ、愛するものとして、
また、純情はその生活に殉じてしまふにはあ
り、情熱の燃ゆるのを望んだ。八年の結婚生
活の後、純情は、愛、そして生活とあるこ
とをわづらふた。
けれども、やがてして生活すべし。その時

行幸

大抵、対する、終、打明ける。終めは、その時
け、う、落着いた自分の心の宿を見出し、幸
福に居る。何故か、は、終めは、その時、
死、う、て、自由な身になる。う、か、来たか、
びある。
ル、ソ、オ、の、江、り、る、比、つ、て、
時代、の、あ、う、と、若、い、か、情、熱、か、烈、く、な、つ、
て、来、た、か、は、か、判、明、せ、る、く、く、思、ふ、
こ、の、中、の、何、れ、の、情、の、端、を、求、め、
何、者、その、人、の、面、影、が、宿、つ、て、あ、る、か、判、明、す、
る、こ、う、で、あ、ら、う、。何、れ、か、時代、の、終、る、理、解、
は、未、だ、結、合、は、全、く、抱、束、で、あ、り、
幸、い、極、端、で、あ、る、

る、異、な、り、。何、れ、と、特、に、女、性、か、る、一、個、人、意、
識、を、身、持、ち、は、い、う、た、時代、の、終、る、は、こ、の、理、
の、悲、劇、が、社、会、上、の、理、象、と、一、層、目、立、つ、て、来、
る、う、い、ある、。泣、き、い、て、泣、く、て、寂、しく、も、け、
げ、る、も、未、だ、消、さ、け、く、も、その、生、を、終、る、つ、ま、か、
、ア、ン、テ、ア、ナ、と、な、つ、て、その、烈、い、
情、熱、を、唯一、の、た、ち、う、と、こ、の、宿、を、求、
む、つ、ま、か、。更、に、ジ、オ、ル、ジ、・サ、ン、ト、と、な、つ、て、

深き自信のものと。我々が天を突撃する一
切の拘束を打ち切ることができる。いづれにもせよ
痛楚は伴ふ。たゞし心持よく目醒めたる女性に
そのいづれかの道を通るかは知られたい。
勿論そのいづれかの道を選ぶ者の数々の幸福
は女性に世には有り得るものである。この苦
痛の岐路を立つ人もまた少くはない。如何
もすつとびあうことが。シリイは寂しい。P
ディナは狂気しい。そしてジョナル・サント
は危い。ほしきだけ境遇を居ても、シリイの意
識が醒めた人とは、あきり不条理的であるか
、あきりあきり無自覚であるかである。

けれども、Pディナナリ例を追ふ人は決して
少くはないけれど、これは足認と伴はしめるた
りたりは、何物をも焼くつきし。何物をも純
化せざるはたぬといふ。却て久の情熱がた
けられぬといふ。女性の金庫が一意に燃えつ
いて、たけられぬといふ。それゆゑには何より
も醒めい。ジョナル・サントを模して反ばる
る。いや、それは、
いたまじき。

行年

の作家たうんには、自尊心と自信との一致が
大切である。その分、複雑さがある。短絡的である
のは非常に苦しい。自尊心は、多くの場合、
はたして他者の自信、相対的自信、自信とは自己の本質を
認める絶対的自信をいふ。
この肉体的、知性的自信力が胸中の湧き出る限
りには、自尊心、自尊、己惚れをもつて文藝創
作に必要である。これは大抵、誤りである。遊戯
的な知識、知ること、自己と力つて、これに拘
わらう。これは、愚弄である。この自信力がたつて
はたさぬ。抑えても、創造の力、それが大
切である。

「要の自覚とは、感情の上の自覚性、思想
上の自覚性、要はこの自己の果すべき使命
を認める自覚性と深く捉えることである。
我々が、これ、それとたゆまず進行すること
である。何事にも、努力は要する。進行には
この努力が必要である。そして、ゆるぎした
生活がある。是認が伴ふ。何人か、この自覚
とその進行の熱意、その前、障害を置き、縁より

か。

シュタルツ・サントにはこの自覚と、その自
覚を實現する熱意と努力とが与つた。彼女は
心持、思想、信念、対する自由をかし綴れたの
みならず、風習、対してつゝも自由と保持
た。彼女は男性の如き服装をもした。もし
こ、~~正~~風の生活はいつてあつた教養ある男性
の如く持つた。その人々から傳へる、社会
階級の、音楽が、文藝批評が、~~書~~画が、豊穠に
るお地ななるさへ、たゞ種々の如く、結核り胎
中には強き生長とつて行つた。悲しき樂才
らオパンがゐた。リストがゐた。カルメンの

作者よりもかゝた。批評家のシュル・ブッフ
はいつも結核と~~鬱~~鬱とした。フロイトの如き
新を送つた。ミゼル・ドゥ・ブリルジの如き政
治家も、ラムネエの如き宗教的哲學者も、ヒ
エル・ルールの如き人道主義的形而上學者も
ゐた。ミゼル・ドゥ・ブリルジ、詩人、フル
・ミゼル・ドゥ・ブリルジ、相愛りこの二人
の間に、その思想感情の相互の深い影響が

行方

別行

日さすれは 幼きものにはあれ その純は
らるるに、金々水々しき荒莽の如き、疾
のさと、後より大地を割つて初るる天目を仰いで
つて、大木の青い伴ひる、執りし素直は、持つ
てある。
ジョルジュ・サントの、このオニ郎は相ある
作の代表作、アン・ジョボオの水車屋がある。
ブロン・シモン男爵夫人は家婦がある。彼女
はアン・リール・エルと名を愛した。けれど
アン・リールは、自分の相思を思ひて、彼女を肯
はない。然るに男爵夫人は、実は、その夫が
死んで財産を無くして死んだ故に、死んで破産
した。

然るに、この唯一の財産は、僅かに土地の
肩が持つてゐるだけである。その土地は、自
分の思ひなり、堂々と代えることす。
その土地の買主は、経営は狡猾な男である
けれど、その土地を價格以下に買取る。
とある。けれど、その場合に夫人は、一つの
條件を附して、その男の娘を、その娘と認
件ではあるが、金々水々しき、又親が結婚を

申るすわい水車屋、是非~~は~~嫁とやることあり
る。其ふふ宜しけれど、事柄が一羽の人々が生
きた。と全時、今と云うことは土地も一切賣
掛られ、夫人とは名ばかり。貴族の傳習を振
替へしき、無一物と云うた然れは、初め
と賣人のアソリにふさわしき平等の一婦人
と云うた。その時、その土地の地主、~~國~~國
以老翁の他一人の娘が氣が狂つて放火をす
る。それがたう。夫人は家も焼かれ、土地も
代~~金~~金を入れた、置いた時分もそのき、焼かれ
としき、明日より片路、建はぬばたうの
まじり有様と云う。その時、膏と嫁めの家か

と賣はれ、ねた極く僅かに財産が、幸も経
めの手、雨に緩るこゝ、云うて生活は辛いと
云うられること、云うた。

~~總~~總と云ふ、所有の如きは人回が是と云ふ
る事柄の却つて邪魔する。所有こそは人々
の間、差別を置く。政治的、社会的特權を破
つても、これは所有の存在する限り、経済的差別
が在る。これは平等ではない。是の平等

2. つけは人は是の事務は終られた。我々
 世に罕く共通財産の管理人であられし。シ
 ン・ガンは言ふ。その夢想せらるる共通財
 産の價格はあげて言ふには牛糞の如きは
 人々の理想希望を超過し、せり。その財産
 に於て佛く人々には道德の上、智力上、肉體上
 の享樂と無なる。それこそ其の初
 めの新人が、完全な人をつくり出さぬ人か
 ら理するべきあり。けだし新法さういふ人
 物といふと何處にも見ることかたし。
 遠く地平線の彼を望んで、その線上を過ぐ
 上る理想の影を胸を跳らせ、やうに宣言

胎の作中とは別分³に見らるゝ。若き時代の
 望の側影である。母體が胎内、勤く新
 しき存在²意識¹として、遠い希望をつたへ、空想
 の舞臺をたぐひ、¹なる。と、今いふ。

やうに。伊藤氏には政治上の大運動が起つた。
甲午の戦争と既にある。甲午の戦争も、
あゝ行くとは終わる。和的悲し

24は公衆生活が珍々を呼ぶ時には消えそし
 ちふ。若し私は家族の最良なものであつた。大衆
 は友人の最上のものであつた。さうして私は最
 後の障壁の下の足り下で徹夜をやるのを
 見た。私は偉大な、孤獨な、撲素な、宣明な
 衆を見た。佛蘭西の、心持、世界の心
 情は統一されてゐた。佛蘭西の民衆は見た。
 世の中の最も偉大な民衆を見た。私は衆を
 も眠らざり、幾日も座りながら居た。人々は狂
 走し、人々は酔ひ、人々は涙の中に眠り、
 大空の下に月曜の朝と幸福があつた。――私
 は胸がいっぱいであつた。私は執した。――
 中

病氣も、個人的な苦しみも皆消え去つてしま
 つた。

佛し、かゝる狂喜はもうなくすめずにはな
 らない。新しい反動が除々に起つて
 来た。撲素な、寛大であつたものの、無
 情な、残酷なもので見えだして来た。一時の隆起
 は一時の沈滞、踊らざるはぬれぬであつた。
 何のたうの狂喜、何のたうの憂ひであつた

行

が判らねた。つひに終めは次の如く
まじき言はたしめられし。伊藤西の民
衆の大衆は、盲目で、惨酷で、無
思で、愚く、愚か。富者は欲せず、貧者
は知らず。
殊に最近の経験した。天災の降し
ても、その災を止るに力なす。城は其
に難った。災を前にして、涙ぐみ、すま
の。輕助と救の精神を發揮し、共同の呼吸とし、
到底平明は見られざる美事と示し、
うには去た。無知で惨酷で、狂暴との、
た常時にはたして見られざる行動とし、
者があつた。要するに非常時に於ては、個人
として、多数者として、常に氣づかざる
ところの長所も劣るも、明白に暴露する
のがある。従つて、ある種の経験、両面
の経験、
多数者として、心の持ちよう、身の振舞ひ、
男つた姿が現れ、まじけなはたけい、
多

ある。我々日本人が非常時をよしと美言は、
それこそ我々日本人の心と結ぶ合点。世
界の人の心と結ぶ合点。あると、全時
は、あの場合を示された。無^{（無）}と狂^{（狂）}の理^{（理）}
必^{（必）}おしも、時^{（時）}の人の心と結ぶ合点。あると、全時
る事は、たゞ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
中^{（中）}の心を消し切られ、残るは、一人残る
が、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
伸ばす、さういふ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
りて、現はす、さういふ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
そ、一層、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時

行

つて、さういふ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
常^{（常）}の心を消し切られ、残るは、一人残る
は、たゞ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
際^{（際）}に、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
伊^{（伊）}の心を消し切られ、残るは、一人残る
際^{（際）}に、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
ら、たゞ、我々日本人の心と結ぶ合点。あると、全時
幻^{（幻）}の心を消し切られ、残るは、一人残る

觀得し大民衆の善美は、全然終めの意識の中
め、消さずはしだい。終めは寧ろその善美の
より多くおぼれに現はるゝ。増えを求む。その
新しい美を、果ては現はるゝ。と努めた。ト
にも、その美、その長年の病苦の生涯の晩年
農民の腹を叩いて、思ひ、新たなる力
新たなる世の祝歌を、うてを期した。ジ
アル、サントも、その変動期の終り、生々
大地上、引渡つて、全く單純に田園の光景の
中、熱情の爆発も、諍議の争乱もない、靜
寂の中、自然の胸の上、自然の終つて、仰
つて、人々の中、表向は隠れ、は居れ
ど、底より、自然の生命を求めた。
終め、その終り、相違する、何は土着ある
。その中、魔の混を、扱つて来よう。
。要する、二人の、忠と著して、る、
。ル、その、二人の、世話を
す。親切に、求め、結、よう、
。隣村、或る、年、丁、よい
。とい、その、
。見、行く、事、その

午二、丁亥、陸家の娘のマリイが奉行へ行
 くと、いふ、この、自らの、マイン、自らの、マイン
 男の、男、どうしろ、離れ、い、い、それ
 と一、清、我、戴、つ、行、つ、やる、こと
 した、行く、途、終、身、は、い、ろ、く、強、をし、ち、つ
 二、や、う、ど、毒、の中、から、泥、の、岸、を、通、つ、行
 くと、どう、か、い、道、を、ち、か、つ、た、り、か、ど、う
 し、こ、も、い、ろ、い、秋、霧、が、濃、く、あ、つ、ま、を、
 日は、暮、れ、雨、は、落、ち、我、男、は、い、く、つ、し、と、
 ぬ、る、一、その、中、に、彼、は、大、き、い、極、の、樹、の、下
 づ、ま、を、宿、る、こ、ろ、に、した、マリイは、甲、斐、々、々、し
 くと、木、の、板、で、い、さ、い、店、を、つ、つ、と、男、の、便、を、
 眠、らせ、い、尿、の、中、に、た、と、歎、息、し、い、つ、も、男
 の、便、の、傍、を、離、れ、ず、親、切、く、あ、ら、う、と、やる、
 ル、マ、ン、は、い、か、う、校、一、く、感、動、した、
 、マ、ン、マ、ン、お、目、ち、の、家、つ、ま、を、土、屋、物、は、る、生
 して、何、れ、と、矢、ろ、の、橋、を、見、れ、は、その、男
 婦、は、見、得、坊、で、エ、知、り、で、面、白、く、い、い、それ
 の、マ、リ、イ、の、雇、主、の、家、へ、行、くと、その、地、主、は
 夫、れ、マ、リ、イ、を、見、て、何、れ、と、物、を、言、わ、たり、し

の仕事のよゝ加つて来る。この自然の暴は手
を合年として即ち人々のよゝ、男を烈しい人
性の壓迫を加へてはたしぬ。二重の壓迫には
倒る人は耐えられぬ。彼等を押しつゝふさ
す。結果の力と美とを奪はせしめつけられぬ。
ぬ。この中より新しく文明の光がさすでも
あう。この多額の農人等の持つ力と美とは
いまた我々の文藝には現れず、奪はせられぬ。
うぬ。最近十年、昔年以来、農人の生活は
づから又舊の材料を甲乙するやうな
つたけれど、いまだ、彼等のたうするの事
の力と美とを奪はせしめつけられぬ。極
るものがある。

（修正）

改むに就て。サントはやつて、好個の老祖母
の年暮る事した。彼等の田舎は熟して、その
縁を合年一回流してやると全うやうな、
人生を愛惜の目をもつて眺め、初期に流れる
の若年期に於ける燃る執情ははたか。たかや
め、平女は人の持つ中、やけ、純情の物
語を人々として聞かせる。この時代は、

修正
250
250

行々

運好く、コロリ又に転はれ、その宿り
つ連れをまうれる。コロリ又もこの旅人の
心へ感じ、集は自らのその人をも思ひつゝ
あなとりあうとを告白する。それから、侯爵
夫人にはその悪口の根も葉もたぎらうたゝが
証明せられ、夫人はうきを蒙りしところを
人へ結成をゆさすところとなる。
此時代は最早や彼は呼ばれ、物事は必
に善美を求め、熱情をあらわすだけには
不満足するものあり、いふことを、
が、悠々と、易々と語らうる。夫れ面白く
おもしろい調子で話しかせる。材料は旧

い時代を擧げても、その幕中へ居る感情は
みだり自分の生きた「史」なり、老幼の人々
さきへ、其事を経験した後、人生はあつた
ゆきもいふ、ちやうどいふやうに、経験と我々
るおち物語をやる。

ジョルジュ・サンドは、文豪者ゝゝも、思
想家ゝゝも、特異な洞察力をもつて、他人大
きく影響を及ぼし、死といふことはあつたとい

その代りに、締められたる代の~~有~~ゆる
思ひ緒結は、締めの中へうつて、たい呼吸を
たし、強い生命をたし、くつきと具伴化せ
しめたる。そして締めは、そのものを十分
に育て上げ、後代の人々の手へ渡したるに
あつた。

即ち、結を通じて個人意識を確立し、
せしめ、傳習を授けしめ、その確立した個
人意識、即ち心體の自由をもち、一般の
別々、多岐な者として平等觀の中で立せし
めんとした。自由と平等とをいふ要は、こ
れは、~~イン~~・~~デ~~・~~グ~~・~~ラ~~・~~ル~~・~~ソ~~・~~オ~~の~~管~~・~~理~~・~~を~~・~~握~~・~~り~~・~~た~~・~~三~~

この標語を、~~佛蘭西~~革命の導印とす。

~~佛蘭西~~革命のたきけ具築師の一面。何れに

も、あれ、必お断りつけられ、語であるが、
それと、いふばかりいふのでなく、たい理
解とあつして、~~その~~・~~う~~・~~い~~・~~は~~・~~く~~・~~自~~・~~由~~・~~の~~・~~身~~・~~を~~・~~も~~
つて経験し、具伴化し、表現し、~~創~~・~~作~~・~~の~~・~~大~~・~~の~~
ひらいた。

締められ生涯のいふ、~~心~~・~~を~~・~~通~~・~~つ~~・~~て~~・~~表~~・~~は~~・~~け~~・~~ら~~・~~る~~

何れも、その思想と持てそれを生み出す感情とは
 まさる前世記の曙光期に於ける人々の異なる思
 想の感激を以て出来た力びであつた。そして
 締めり田舎があるそれを見て、それを愛する
 の故まつたところであらう。早目より見れば、
 それ等の思想は細く、それ等の感激はあ
 まり狂いしやうといふ人があらう。異なれど、
 いかに、何人にもその青年期を振返れば、
 今に地味か下さゆるる異なれど。要は後代に
 一縷の光を遺した思想が、これには、何れなる
 時代か、人間の長き歴史より強て幼稚たる時
 代のあらむであらう。

結女が育つた思想が、
 彼女の養つた感情が
 現世に在りしつゝ、
 如何に完達してゐる
 らうか。我々は現世に
 在りて、曠古期を至つて
 我々の日本人として、
 世界の思潮の波がうづ
 きあつり、我々の頭上
 であらう。更
 り烈しい自然力の一
 の洗練を我々の上へ蒙
 らせ給ふ時、
 緊張した意識、
 新鮮な

